一色順心名誉教授を偲んで

織田顕祐

二〇一六年六月六日、一色順心名誉教授が逝去された。三月九日に最終講義を終えられ、定年退職されたばかりであったから、いかにも急な感が否めない。追悼文を書くように命じられても実感がないというのが偽らざる心境である。私にとっては学部学生の頃からの先輩であるから、「一色さん」以外の呼び方が浮かばないが、ここでは「一色先生」と呼ばせて頂く。一色先生は、一九五〇年に岐阜県の大谷派寺院に生まれた。一九七三年大谷大学文学部仏教学科卒業、一九八〇年大谷大学助手に着任され、一九九九年教授に昇格された。二〇〇八年から二〇一〇年には大谷大学短期大学部長の要職も勤められた。

私が仏教学科に入学した一九七三年に、一色先生は大学院に入学されているから、ちょうど四つ年上ということになる。初めてお会いしたのは、文学部の鍵主ゼミの演習だったと思う。当時、ゼミでは『大乗起信論』を講読しており、三回生で初めてゼミに参加した時、全く雰囲気の異なる一人の先輩がいた。それが一色先生の第一印象である。それから今日まで四十年以上になるが、こんな付き合いになるとは当初思ってもいなかった。ゼミの先輩であり、一色先生は岐阜、私は愛知出身と郷里も近いことから、公私にわたって色々とお世話になった。その間の、学問的なこと、学内の様々な用務のことなど数え上げればきりがないが、その主なものを紹介して追悼に替えたい。

一色先生の学問関心は、『大乗起信論』に始まり、その主要な注釈を書いた法蔵とその華厳教学研究、法蔵周辺の大人物である復礼に関する研究へと進み、最後は『華厳経』特に入法界品の善知識周辺の問題に進展していかれた。そういうわけで、先生が最初に公にされた論文は、「起信論における熏習について」（『印度学仏教学研究』）であり、最後のお仕事は二〇一五年五月二六日の大谷学会春季公開講演会の「『華厳経』入法界品における善知識の過去世物語り」である。一貫して『華厳経』と華厳教学を中心に学んでこられたと言えよう。その中でも代表的な業績は、『唐復礼撰十門弁惑論注解』（平楽寺書店、二〇〇六年）である。こうした一色先生の歩みは、恩師鍵主良敬先生とその師山田亮賢先生の薫陶の賜物といえる。特に山田亮賢先生を通して、佐々木月樵、曽我量深、金子大栄といった先生がたの教えを徹底してお聞きしたことが大きく影響していると思う。

当時、山田亮賢先生は「浄眼洞」と称する聞法会を毎週金曜日の夜にご自宅で開かれていて、私たちはそこで様々な講義を拝聴したのである。それはまさに大谷大学の生証人の声を直接お聞きするというべきもので、まことに得難い一期一会の場であった。その浄眼洞は山田先生亡き後、今も同人によって続いている。『華厳経』は大乗経典の中でも中心的なものであるから、注釈も多く書かれてきたし解説書も様々に存在する。しかしその中で、佐々木月樵が明らかにした「華厳経の新しき見方」（全集第五巻所収）は、それらとは全く異なる『華厳経』そのものへ直参する必要性を説いており、私たちは山田先生を通してそうした佐々木月樵の精神に触れ得たのである。そのことによって一色先生は次第に『華厳経』そのものへと学問的動機を深めていかれたのだと思う。学部のゼミでも一貫して入法界品を学生と一緒に読み、いくつかのヒントを得られたように仄聞していたが、公刊することなく終わってしまい全く残念である。

大学の用務という点では、仏教系六大学による「大蔵経学術用語研究会」の事務局兼研究者として、大谷大学の同研究会を支えておられたことも忘れることができない。「大蔵経学術用語研究会」とは、関西の大谷・龍谷・高野山、

関東の駒沢・大正・立正の仏教系六大学を中心に様々な社会的支援によって出来たものである。その目的は、『大正新脩大蔵経』の一般利用の促進にあり、具体的には蔵経中の主要用語を選んで分類し、索引として公にする事業である。いまでは『大正蔵経』はインターネットを通じてテキストデータとして提供されており検索自体は瞬時に可能であるが、『大正新脩大蔵経索引』は単なる索引ではなく、難解な学術用語を一般利用できるよう配慮されたものである。それは、昭和三二年に企画が始まり、平成二年に最後の出版を終えるまでの三十年あまりにわたって続いた事業であった。当初は、有力企業や全日本仏教界の賛助によって始まり、途中から文部省（当時）の科学研究費と出版補助を定期的に受ける事業となった。全四四冊のうち、大谷大学は出版第一号（毘曇部下、昭和三七年）を皮切りに合計で九冊の作成を担ったのである。『大正蔵経』の本編二冊約二〇〇〇ページを一まとまりとして、本文を読み、必要な用語約十五～二十万語を選び、カード化し、語彙別に分類し、アイウエオ順に配列したものを原稿化するという手順で行うのである。まさに「人類最後の手仕事」（当時の担当者談）にふさわしい大事業であった。膨大なカード作成や、原稿化には多数の学生の協力が必要であり、これらが定期的に科学研究費の補助を受ける為には途方もない量の事務的な作業が必要であった。一色先生は大学院生の頃からこの事業に専心されたのである。私は主に、一色先生を補助していたのであるが、先生は抜群の事務能力を持っておられた。それは決して要領よくやるというのではなく、コツコツと地道に努力を重ねるという姿勢で、本当に頭が下がったものである。こうした地道な努力はあまり世間から評価されないが、学問研究と裏表であることをまさに身を以て教えていただいたのである。

一色先生のコツコツとした努力は、蔵書収集の面にも現れていた。どんなに忙しくても常に新古書の情報を探し尽くしていて、大概の書物は図書館に行くより一色先生に借りる方が早かった。多忙な大学業務を終えて、これからいよいよ『華厳経』の深みを求めようとしておられたに違いない。それもかなわずご逝去されたのは、後輩として本当に悔しい気持ちで一杯である。